
第一二四話

如蔵尼平良門事

『前太平記』上 卷第十八 三七三頁から三七七頁より

[将門の遺児]

この時、今は亡き平将門の子供を、姉は「如蔵尼」、弟を「平太郎良門」と言った。さて如蔵尼が、まだ幼かった時、その見目は非常に美しかったので、近国の武士や役人が縁をたどり、（彼女を）迎えて妻にしようと望んだが、この女は元から

此女素より

俗世への関心がなかったため、わざわざ承諾することもなく過ごしていたが、将門

塵世の情なかりし故、

敢へて承け引かず過ぎ行きしに、

が討伐される時になって、（討手から）逃れて奥州に隠れ住んでいた。盛りの年頃になってついに仏門に入って、恵日寺(老)の側に庵を建てて、さみしい独り暮らしをして住んでいたが、ある時病気になることもなく亡くなり、すぐに閻魔王の役所にたどり着いた。庭には多くの罪人を座らせ、獄卒は罪の重さ軽さを調べると、獄卒は（罪人を）連れて行き、ある者は刀の山・剣の木(武)に追いかけて登らせ、ある者ははげしい炎の中に投げ入れている様は、見ているだけで身の毛がよだった。「ああ

「あな

恐ろしいなあ。私は生きている間、覚えている中でも犯した罪がないといっても、

恐ろしや。 吾存命の間、 覚へて犯せる科無しと雖も、

家が貧しかったので全く仏を供養したり僧に施しをするなどの善行はない。どのよ

家貧しければ曾て供仏施僧の善因なし。

うな苦しみを受けるのだろうか」と涙が湧き出るようだ。このようであった状況

何なる苦患をか受くべし」

で、手に錫杖を持っている威厳ある様子ので厳かな小僧が、光を放ってきらきらと

手に錫杖を持ちたる比丘、其威儀端嚴なるが、 光明を放って赫奕とし、

し、不思議な香をかおらせてぷんぷんとさせて、役所に来られた。その時、多くの

奇香薫じて芬郁として 廳所に来臨し給へり。

獄卒が、「地蔵菩薩の来臨である」と言って、皆席を避けてうずくまる。この女は、菩薩のお名前を聞いて、嬉しく思う気持ちが実にもったいなくて、急いで駆け寄って裳(参)の裾に縋り、「どうか、菩薩さま私を救ってください。南無帰命地蔵菩薩」と唱えて手を合わせてこうべを垂れる。その時菩薩は、閻魔王に向けて仰ったことには、「この女は前世での由縁によって、かりそめに女の姿を受けるといっても、全く勝手気ままなことをせず、信仰の固い女性である。それでいて寿命はまだ迎えていない。早く地上に帰らせよ。ここに繋ぎ止めるべきではない」と。閻魔は

かしこまって申し上げることには、「(菩薩さまからの) 厳命をどうして捨ておくだろうか。必ず地上に送ろう」と言葉があったので、菩薩はすぐにこの女を連れて役所の門をお出になり、おんなに伝えて仰ることには、「お前の父将門は、生涯の内で仏の心に背き、人々の期待に逆らい、その罪の深く重いこと、喩えるべきものがない。その郎等らはすべて鉄鋸地獄(肆)に堕ちている。その苦しみをお前に見せよう」と言って、再びその場にたどり着きなされた。女も恐ろしく思いながら、言葉にしながら菩薩の御名を念じ思って、その有様を見ると、獄卒が罪人を捕えて、熱い鉄の台に乗せて、熱い鉄の縄でその身に墨を打ち付けて、熱い鉄の斧でこれを斬り、また熱い鉄の鋸でズタズタに引き裂いている。このような仕打ちでは、きっともう息絶えているだろうと思うが、そのように苦しむ声を上げて泣き叫ぶ。よくよくその罪人を見ると、父将門を始め兄弟や(将門に) 従った者共が全て目の前で咎められる。女は、余りの悲しさにお向かいいたし、「どうにかしてこれを救うことはできないだろうか。どうか私に御教示ください」と、血の涙をしたたらせて申し上げたところ、菩薩がおっしゃったことには、「お前がよく私の言を受け入れ守ろうとするか否か(で変わること)だ」。女が言うことには、「仏の御慈悲はこのよ

「大慈右

うに私を救ってくださった。どうして仏の言葉に違えるだろうか」。菩薩は声に出

我を濟ひ給へり。

何ぞ仏言を違戻すべけんや」

して仰ることには、「人の身は受け止めにくく、仏の教えを悟りがたい。宿縁や幸

「人身受け難く、

仏教遭ひ難し。

は多いことではないので、多くの縁を共に備えることはできないだろう。お前は地

宿因多幸に非ずんば、

諸縁を具すること能はじ。

汝本土に

上に帰るならばすぐに剃髪して、恵念して丹念に修行して、進んで身命を惜しむ

帰らば速やかに剃髪して、

一心に精修して

敢へて身命を惜しまざれ」

な」と。女は聞き終わって謹んで首を垂れようと思って、そのままよみがえった。

女は尊いことにもまた悲しいことのようにも受け取り心を入れ替えたので、いつも

通っていた仏門に服従して出家する身の姿となり、法名を「如蔵」と改めて、心を

込めて地蔵菩薩の名号を守り、行往坐臥_(伍)を全く欠かすこともなかったもので、世間

には「地蔵尼」と名乗った。

【良門、父の仇討を決意す】

また弟の良門という者は、将門の妾の子である。父が滅びる時はまだ母の胎内に

いたが、その妾は逃げて生国である常陸に帰り、同じ年の冬のはじめにその子を産

み落とした。生まれた子は男の子であったので、まだ方角も分からない幼子である

といっても、朝敵の残した子であるからといっても、その祖父（妾の父）はお上のお

耳に入ることを恐れ、母の乳から離して、奥州の姉（如蔵）のもとに送らせたのだ

った。姉はどうしようもないといっても、確かに弟であるので、流石に見捨てるこ

ともできず、隣家から母乳を求めるなどして育てあげたが、もしお上に見つかれば、ひどい目を見るのだろうか、安心できず月日を送ったが、なんにせよ十五歳になった。ある時、姉の如蔵が申し上げたことは、「今まであなたは父を誰かとも知らず、ひたすらに私を母とだけ思い暮らしてきたが、私は母ではなく、あなたの姉である。その事情を話して聞かせよう。よく聞いて、出家をして仏の道に入り、父の菩提を弔いなさい。（我等の父は）もったいなくも桓武天皇の五代目の孫で、以前の將軍良將の嫡男で、相馬小次郎將門といった人である。こういったことで決心し、朝敵となられることによって、平貞盛、藤原秀郷が多くの軍を率いて、数カ月にわたって攻めたところ、ついに一族は残らず討伐された。その時あなたはまだ母の胎内にいたが、祖父は心無い人で、朝敵の子孫を隠しておいては、自身への咎めは逃れられないと思ったのだろう、生まれてから一月もたたないうちに、（あなたを）私のもとへ送ったため、色々世話し育てたのだ。しかし私が、尼となった理由も、このようなお告げがあったから、父のあの世での哀れさで、このような姿となった。あなたももう十五歳になるので、道理の分別もできるので申し上げるので、このままであれば最後には探し出され、受刑の辱めにあうはずなので、早く出家して父上の菩提を弔って差し上げ、その自身の災難も逃れるべきだ」と詳しく話して聞かせ、「早く剃髪せよ」とすすめたところ、太郎は聞き終えず、「どうして今までこのようなことをお知らせにならなかったのか。ただ下賤なこの土地の百姓どもの子であるかと思っていたので、人と交流するのにも自分のことながら気後れ

人に立ち交はるにも、我ながら心臆して、

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

して、見下げ押さえつけられたことこそ無念だ。正統な皇孫として、このような汚

悔り気押しされし無念さよ。

らしい家に住んでいることこそ残念なことである。しかし私も出家せよなどとは、あまりにつまらないお言葉。よし父上は朝敵となられるとも、その父を討った連中こそ我が父の仇だ。そのまま敵を討たず生かしておくようなことは、武士の道を外れ、さぞ草場の陰で父上が私を恨んでいらっしゃるだろう。あの世での安心とやらは、貴方が尼となられるので、その役目の元に（父らを）吊って仏の道の勤行をなさってください。私は男子に生まれたので、父の仇を討って武人の道理をたてるべきである」と、目つきを変えて申し上げたところ、如蔵は「愚か者の申し上げるこ

「薄情の者の申し条や。

とか。父の咎めの様子を聞かせたならば、出家の心もおころうかと思ひ話したの

父の呵責の様をも語りなば、

発起の心も有らんかと思ひ語り出でたれば、

で、かえって憎悪の心の種となった。依然としてあの世の苦しみを重ねているこ

却句瞋意の種と成れり。

猶も黄泉の苦しみを重ねらん事の悲しさよ。

との悲しいこと。あなたがどれほど強気に思って、天下を敵にして、どうやって目的を遂げるのだろうか。無意味のことを決心して、修羅道^(陸)の報いを招くよりは、香華の道^(漆)を選んで菩提を弔い、あなたのあの世で受ける罰を救うのだ」と繰り返

し繰り返し説得し申し上げたが、「さあさあ、そうではない。たまたま自分は男子

に生まれて、大事な髪を剃る事は一体なんのためだ。本当に今まで育ててくださっ

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

可惜髪を剃らん事、そも何の為ぞや。

たので、姉上というものの親も同然である。親の命に背くことですが、こればかりは許してくれ」と言って、とても承諾の気配も見えなかった。

【良門出奔】

こうして如蔵は、時折出家によって得られる果報を言い聞かせてすすめたが、まったく耳を傾けず、十六歳の春に里の人の協力を得て、こっそりと元服をし、烏帽子をかぶって姉の如蔵の前に出て、「今までそうしてご意見もございましたが、心

「今までさりととも御諫めも候ひしか共、

に生まれぬ信仰心が、何の役に立つだろうかと思ひ、このように一人前の男に

心に発らぬ青道心、 何の用にか立つべきと存じ、 斯く男に成りて候。

なっております。父は将門といい、祖父は良将と伺ったので、父と祖父の名から

父は将門、 祖父は良将と承りつれば、 父祖の名を取りて

取って、『將軍太郎平良門』と名乗ることにします。日頃から仰られた命に背きま

將軍太郎平良門と名乗り候。 日来の命に違ひ候へば、

すので、きつとご勘当のお気持ちと思ひ申し上げます。たった今この時が、この世

一定御勘当とこそ推量申して候へ。 唯今が 此世の

のお別れでございますので、御暇をいただきます」と吐き捨てて、すぐに庵を出て

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

御余波にて候へば、

御暇を乞ひ候」

いった。如蔵尼は悲しくなって、「ああ待て、少し言うべきことがある」と続いて
駆け出したが、もう姿も見えなかった。「ああ情けない若者の振舞いだ。出家せよ

「あな心憂の冠者が行跡やな。 出家せよと

と勧めるのも、一日でも世の中で安らかな暮らしをさせようとするためであるの

勧むるも、

一日にても世を安く暮らせんとこの為なるに、

に、悪心を抱いて、何処へ行ってしまったのだろう」と、後の自らに降る危険を知

悪しくも意得、

何処へか行きぬらん」と、

後の寇をも知らずして

りもしないで、（弟の行く末を）恋しく思い悲しみにくれた様子は、姉弟の愛情こ

慕ひ悲しみける、

連枝の情けぞ

そ哀れなものと感じられた。

哀れなる。

注釈

※壺・恵日寺……現福島県耶麻郡磐梯町にある寺院。

※貳・刀の山・剣の木……刀山剣樹地獄のことか。『善悪因果経』には、「今身屠殺斬截衆生者。死墮刀山剣樹地獄」とあり、生物を刃物で殺すことを好む者が落ちる地獄だという。（参考文献：長岡乗薫 編『仏説善悪因果経』大日本監獄教悔師通信所 明治 25 年 12 月）

※参・裳……僧が腰に身につける衣服。

※肆・鉄鋸地獄……『善悪因果経』には、「今身飛鷹走狗。喜獵射者。死墮鉄鋸地獄」とあり、鷹や犬を使い狩を楽しみ、生き物を殺すことを好む者が落ちる地獄だという。（参考文献：貳の書と同じ）

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトの URL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※伍・行往坐臥……行く事・止まる事・座る事・臥す事。つまり規則正しい日常の働き。

※陸・修羅道……六道の世界の一つで、阿修羅が住み、争いの絶えない世界。

※漆・香華の道……香と花は仏の側にあるもの。つまりは仏道。

24歳最後の訳の更新です。なかなかドラマチックな展開です。本話を訳しているときは、まだ将門公のお話をほとんど訳していないので、訳者の理解が及ばないのが悔しいです。人と人とのやりとりが、ああやっぱり面白いなあ…という気持ちで訳しておりました。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2019/11/2

改訂：2021/3

海熊童子